

「いなぶまゆっこ」の活動紹介

—地域ブランドをどう生かすか—

An Introduction of “Inabu Mayukko”

堀田 裕子 Hotta Yuko

概 要

「いなぶまゆっこ（まゆっこクラブ）」は、1997（平成9）年から豊田市稲武地区で、養蚕から糸引き、作品制作に至るまで一貫して行なっている団体である。古橋源六郎暉兒氏の貢献により、稲武の養蚕は明治時代から盛んだったが、高度経済成長期を境に衰退し、養蚕農家は数件残るのみとなった。この状況を憂い、稲武を再び蚕の里にしようと立ち上がったのが金田平重代表である。今年で134年目を迎えた伊勢神宮への献糸は、「いなぶまゆっこ」の恒例行事の一つである。かれらの活動は成果をあげているものの、現在、メンバーの高齢化と後継者の問題、資金問題などを抱えている。

「いなぶまゆっこ」へは、2015（平成27）年より「現代マネジメント実習」の授業で実習地として入ることになっている。そのため、今年度の調査をまとめ、「実習」へとつなげていきたい。本稿では、「いなぶまゆっこ」と筆者との出会いから、「いなぶまゆっこ」の活動紹介、大学祭での紹介パネルの展示など、まだ始まったばかりの「いなぶまゆっこ」との関わりを振り返る。そして、「いなぶまゆっこ」が地域ブランドとしての地位を確立する可能性について若干の考察を行なう。

キーワード

| | |
|-------|-------------|
| 地域社会 | Community |
| 豊田 | Toyota |
| 養蚕 | Sericulture |
| 伝統 | Tradition |
| 繭（まゆ） | Cocoons |

目 次

- 1 はじめに——出会い
- 2 「いなぶまゆっこ」とは
- 3 養蚕の概要
- 4 大学祭での紹介
- 5 地域ブランドとしての可能性
- 6 おわりに

1 はじめに

「いなぶまゆっこ」と私の出会いは、まったくの偶然であった。まずは、私が「まゆっこ」と関わるようになった経緯を紹介しようと思う。

2011（平成23）年のある日、私の在住している愛知県尾張旭市の広報「あさひ」を見ていたら、4

月から開催される「愛知県男女共同参画社会人材育成セミナー受講生募集」という見出しに目が留まった。このセミナーは、愛知県内の各市町から1、2名ずつ集まった受講生が、月に1、2回ほど開催されるワークショップ形式の講義を受けるというものであり、交通費は自費負担だが、受講料は無料であ

った。毎回、大学教員やNPO団体のメンバーなど、さまざまな立場から男女共同参画に取り組む人びとが講義を行なうというものだった。

私は当時、6校ほどの大学・専門学校で社会学関連の講義を担当する非常勤講師であった。社会学への興味関心の延長上に男女共同参画社会にたいする興味関心があったのも当然ではある。だが同時に、ふだん講義をする立場として、むしろ自分が講義を受けてみて、今後の自分の講義に何か活かすことができればという思いもあった。かくして、私は尾張旭市役所へ赴き、受講生に応募し選ばれた。とはいえ、応募したのは私だけだったのだが。

約1年間続いたセミナーには、愛知県内のすべてではないもののいくつかの市町から30名ほどが参加した。グループディスカッションも頻繁に行なわれたが、私は、一宮市、豊田市、東浦町からの受講生と一緒にグループを組んでいた。

別のグループに、瀬戸市から来ていた斎藤貴子さんがいた。彼女は、テーブルコーディネーターの資格を持ち、イベントプロデュースなどの事業を展開している「YUI」の代表であった。瀬戸市は尾張旭市と隣同士であり、また私の親類が瀬戸市に住んでいることもあって、斎藤さんと少しだが話す機会があった。その際に、斎藤さんが現在関わっているある団体が、若い人の手助けを必要としている、と聞かされた。私が大学教員をしていることは話してあったので、ぜひ学生さんをその団体の活動に動員してほしい、と言われた。

しかし、当時の私は複数の大学で講義を担当していたものの、実習的な授業を持っていなかった。そして何よりも、非常勤講師という立場であったため、学生を学外に連れ出す権限は何ら持ち得なかった。そのため、せっかくの斎藤さんからの誘いにも、乗ることができなかった。そして、2012（平成24）年2月にセミナーは終了した。

その後、ときどきグループのメンバーと会う機会はあったものの、斎藤さんとお会いしたりお話ししたりする機会は約一年間なかった。とはいえ、2011年度の受講生のつながりを何らかのかたちで維持しようという受講生からの提案により、私たちはメーリングリストというかたちでつながっていた。

そして、2013（平成25）年3月、私は愛知学泉大学現代マネジメント学部にて専任教員として就職することが決まった。本学部にて特徴的な授業である「現代マネジメント実習」は、学生に実際にマネジメン

トを体験させるというもので、担当してもらう可能性がある、と大学の方から言われた。

私はすぐに斎藤さんのことを思い出した。だが、申し出をいただいてから1年も経ってしまっていたため、すでに必要ないかもしれない。それでも、“ダメ元”で連絡だけでもしてみよう、と、メーリングリストを使って早速お知らせをした。受講生のなかには団体で活躍している方々も多くいたため、どなたかの目に留まれば学生の力を必要としている団体があるかもしれない、という思いもあった。

すると、斎藤さんから返信があった。件の団体は、まだ学生の力を必要としているということだった。急いで私も返信し、すぐにというわけではないが、ぜひお手伝いさせていただきたいと書いた。聞くと、斎藤さんは、その団体のプロデュース活動をしていたが、その契約が切れるのが2014（平成26）年度であることから、それ以降に「交代」してもらえないかということだった。斎藤さんのようにプロではない私たちが、斎藤さんと同じように活動ができるかどうかは不安だったが、彼女が作り上げた基盤をさらに補強していくかたちで関わることができそうだと考えた。かくして、私は、斎藤さんが関わってきたその団体——「いなぶまゆっこ」——と関わることになったのである。



写真1 掃立祭りにて蚕に餌をあげる筆者。蚕はとても小さく、中央の女性は虫眼鏡で蚕が餌を食べる様子を観察している。

私は斎藤さんの知人というかたちで、2014（平成26）年5月26日、「掃立祭り」に参加させてもらうことができた（写真1）。「掃立祭り」とは、卵から孵った蚕にはじめて餌をあげるイベントである。初対面ながら私も、蚕にソーセージのような形状の人工飼料の餌をあげさせてもらえた。わずか数ミリの黒く蠢く蚕を前に、「いなぶまゆっこ」の皆さんが

口々に「かわいい」と言っているのが印象的であった。その後、8月13日には私一人で、10月8日には学生4名とともにふたたび「まゆっこ」を訪問した。また、8月31日には、とよた Ecoful Town（愛知県豊田市）で行なわれていたイベントに赴いた。

「いなぶまゆっこ」との関わりは始まったばかりである。まだ研究というほどには成熟しておらず、フィールドワークを通して調べるべきことも山ほどある。だが、この一年足らずの数回の関わり合いのなかで得た「いなぶまゆっこ」に関する知識と、そこから生まれてきた、学生たちを含む私たちの活動を、本稿では紹介していきたい。そして、本稿を2015（平成27）年度から始まる「実習」のための予備的考察として位置づけたいと思う。

2 「いなぶまゆっこ」とは

2.1 稲武地区の養蚕業

「いなぶまゆっこ」は、愛知県豊田市の稲武地区にある、養蚕から作品制作までを一貫作業で行なっている団体である。稲武地区は、豊田市の南東部、豊田市街地から車でおよそ1時間半の場所に位置している。稲武地区は標高505メートルと豊田市内でももっとも高い所であり、夏には避暑地として訪れる人も多い（「とよたクールシェアで涼しく快適な夏へ」（豊田市環境政策課））。

「いなぶまゆっこ」の主な活動場所である「まゆっこセンター」に隣接する古橋懐古館は、稲武地区の名士である古橋源六郎暉兒（てるのり）氏（1813年生、1892年没）の偉業を記念して建てられた。現在は、稲武地区に残る貴重な歴史的資料が展示されており、一般の人でも閲覧することができる。古橋源六郎暉兒氏という人物は、明治時代に、生まれ故郷である稲橋村（現在の豊田市稲武地区）の住民らに桑の苗を配り、蚕を育てて生糸を採り売ることを広めたことで知られており、豊田市の偉人の一人として挙げられている。2013（平成25）年には豊田市文化振興財団が、古橋源六郎暉兒氏を題材にしたアニメを作成している（「古橋源六郎暉兒物語——伊勢神峠の夕日に誓う」）。古橋氏の活躍により、稲武地区の養蚕業が盛んになったことは、1881（明治14）年に、稲武地区で作られる生糸を「献糸会」として伊勢神宮へ奉納することが認められたことから推察できる。それ以後、2014（平成26）年現在まで、

135年にわたってこの奉納は続けられてきている。かつては、稲武地区だけでも13戸が、伊勢神宮に生糸を納めていたということである。

1959（昭和34）年には伊勢湾台風に見舞われたものの、災害復旧に際して、蚕の共同飼育施設の建設が始まった。その結果、当時の世帯数の約4割が蚕を育てることとなり、養蚕業は稲武地区に欠かせない産業へと発展することになった。人びとは、風通しの良い自宅の二階で蚕を育てていたという。そして、養蚕業は稲武地区の大きな現金収入源となっていた。

稲武地区の養蚕業者は、豊橋の「石川製糸」や岡崎の「三龍社」などの「取りまとめ場」と取引をしていた。「輸送証明」を取り、横流しを禁止したそうである。当時はこれらの「取りまとめ場」へ十日ほどかけ、泊りがけで行ったという。まだ道路が舗装されていなかったため、道中はみんな土まみれ、ほこりまみれになって行った。「取りまとめ場」に着くと、風呂に入れてくれたそうである。「国を助けたお蚕様」。そして「良い繭は売らなければならない」。蚕が日本経済の一時期において、非常に珍重されていた様子が伝わってくる。

また、1990（平成2）年には、今上天皇（現在の天皇陛下）が即位したときの祭礼に使用する絹織物を、宮内庁に献上する機会にも恵まれた。

だが、稲武地区の養蚕業はずっと栄華を極めてきたわけではない。日本の養蚕業全体に共通して言えることでもあるが、高度経済成長期を境に、安くて丈夫な化学繊維が優勢になっていき、高価で希少な絹糸は敬遠されるようになっていった。

そして、かつて稲武地区住民の約4割、およそ400戸にも及んでいた養蚕家は、1997（平成9）年にはわずか3戸になってしまったそうである。こうした状況を受けて、稲武地区をふたたび蚕の里にしたいという人びとの願いから、1997（平成9）年に、「いなぶまゆっこ」が誕生した。「稲武を蚕の里に！」がそのスローガンである。

2.2 メンバーと活動

現在、「いなぶまゆっこ」のメンバーは8人である。代表を務める金田平重（かなだへいじゅう）さんは、おもに養蚕の指導を行なう、「いなぶまゆっこ」の大黒柱である（写真2）。平重さんの奥様である金田ちゑのさんは、糸よりや機織りなどの技術指導を行なっている。ちゑのさんは若い頃、繭から糸を取出し

反物にする仕事をしていたそうである。そして、二人の指導を受けながら「まゆっこ」を支えているのが、丸山紋子さん、鈴木淳乃さん、山本サナエさん、安藤君子さん、原田行代さん、福田玲子さんである。「いなぶの羽衣」というブランド名の付けられた、ストールやショールなどの糸染めや織りなどの手間の掛かる大掛かりな作品には、その一つ一つに、「作家」としての彼女たちの名前が記されている。



写真2 「いなぶまゆっこ」代表の金田平重さん。これは「糸取り」をするための器械で、中央の丸い部分に繭を入れ湯をはった鍋を置き、そこから糸を引き出す。

いっぽう、もうひとつのブランドとして「まゆっこクラブ」がある。こちらは、繭細工を中心とする作品を展開しており、繭人形や繭花で置物やコースージュなどを制作している。

「いなぶまゆっこ」のメンバーは全員が、常時「まゆっこ」の仕事をしているわけではなく、ふだんはそれぞれ別の仕事をしている。したがって、作品制作の時間も限られており、時間のないなかで染色や機織りなどを行なっている。そして、土日祝祭日には蚕のことを知ってもらおうと、イベントのためにあちらこちらに出向いている。糸取りに使用する大きなコンロ式の器械は、運ぶのに大変な手間がかかる（写真3）。

また、「いなぶまゆっこ」は養蚕から作品制作までを「一貫作業」で行なっているところに特徴がある。たとえば、2013（平成 25）年に世界遺産に登録された富岡製糸場は、「糸取り」という、繭から糸を取る仕事をする工場であるが、その繭は各地にある養蚕農家が作ったものである。そして、製糸場で作られた生糸は、染色工場や機織りの工場を経て製品と

なり、小売業者の手に渡ることになる。いわば明確な「近代的分業」で成り立っていたのである。だが、「いなぶまゆっこ」はそれらの作業をすべて一貫して行なっている。自分たちが手塩にかけて育てた蚕だからこそ、生産過程がすべて可視化されており、より愛着をもって作品制作ができるのかもしれない。



写真3 8月31日に、厳しい残暑のなか、とよた Ecoful Town で開催されたイベントの様子。右側に、写真2の糸取りをする器械が置かれているのがわかる。ここで、糸取りを実践し蚕の魅力を紹介した。

2.3 作品

「いなぶまゆっこ」では、「稲武の羽衣」ブランドの草木染め織物のショールやストール、また「まゆっこクラブ」の繭人形を用いたストラップや置物、繭花を用いたブローチや造花、シルク糸で作ったミサンガなどを制作している。ストール、ショール、ブローチなどには、「作家名」も記されている。

織物を織るメンバーは生糸の染色も行なっている。近くに生えているさまざまな草木を採ってきて、「今度は紅葉の葉で染めてみようかな」などと試行錯誤しながら染め上げている。まさに、同じものは二つとない。

織物に使う器械は、釘をいっさい使わないで作られている。そのため、器械の至るところに「ゆるみ」が生じているが、この「ゆるみ」があるおかげで、真っ直ぐな布を織ることができるそうである。この器械の調整をするのも、金田平重代表の重要な仕事のひとつである。

そして、「まゆっこ」にはおもしろい商品がある。蚕は、繭を作り始めると、上へ上へと登る習性がある。その習性を活かして“作られた”のが、うちわである（写真4）。うちわの骨組みだけを斜めに置き、蚕が上へあがりながら糸を張っていく。人間がやることといたら、ときどきうちわの角度を変えることだけである。いわば“蚕が作った”うちわなのである。



写真 4 “蚕が作った”うちわ。この中に、草花や繭花が挟み込んである。



写真 5 「繭の洗顔ばふばふ」。生糸のまま丸めてパフ状にしてある。

もう一つ、興味深い商品が、生糸の素材をそのまま活かした「繭の洗顔ばふばふ」である（写真5）。

このように、「まゆっこ」では養蚕の伝統を今に伝えるためにさまざまな試みをしている。昔ながらの繭花などもあるいっぽうで、「繭の洗顔ばふばふ」のような新しい商品なども制作・販売している。販売によって得たお金は「まゆっこ」の資金となり、さらなる活動促進につながる。したがって、伝統を守っていきながらも、現代という時代に合う産品を制作していかなければならない。伝統的な文化と技術の継承には、こうした困難が伴うのである。

3 養蚕の概要

3.1 養蚕の概要

蚕の卵を「種」と言う。「種」の品種は何千種類とある。そのなかでもおよそ 20 品種が市場に出回っ

ている。「種」を専門的に作る業者があり、そこから購入し宅急便で送ってもらう。桜の花の咲く頃、4月上旬くらいに発注する。「いなぶまゆっこ」の場合、どの品種の蚕を育てるかは、業者に任せているそうである。現在は、ともに品種改良されたものである、雌の「春嶺（しゅんれい）」と雄の「鐘月（しょうげつ）」とを掛け合わせた卵を使用している。どちらも丈夫な品種であるという。

卵から孵った幼虫の蚕には、最初は人工飼料を与える。このイベントを「掃立（はきたて）祭り」という（写真6、写真7）。「いなぶまゆっこ」では、毎年5月25日前後に開催している。人工飼料を与えるのは、蚕の成長が揃うためであるという。その後、桑の葉を与える。なかにはクスギしか食べない蚕がいたり、よほど空腹な時には極の葉を食べる蚕もいたりするそうである。蚕は濡れている桑の葉を好まないため、桑の葉を採る際の天候にも留意しなければならない。桑の葉を与え始めてから、ふたたび人工飼料を与えることはできないそうである。蚕が桑の葉を食べる時は「ムシャムシャ」と音がするという。蚕は「温度の虫」とも言われており、温度が高いとよく食べるが、低いと食べない、かなりデリケートな生き物である。



写真 6 「掃立祭り」の様子。まず、紙に包まれた「種」から孵化したばかりの蚕を蚕の寝床に広げる。

現在の蚕はとても弱く、餌を自分で探しに行くことすらできない。かつては養蚕のための学校もあったそうだ。人間のせいで、蚕の生態が変わってしまった、と金田さんは言う。したがって、今では蚕のいるところに人間が餌を置いてあげなくてはならないのである。金田さんは、人の手を加えることが大切だ、と語る。



写真7 孵化したばかりの蚕。わずか2mm程度の大きさである。

また、蚕には、軟化病と硬化病という不治の伝染病がある。軟化病とは、蚕が「溶けてしまう感じ」になる病気で、硬化病とは蚕が「白い石灰の塊のように」白くなり、硬くなる病気であるという。一度罹ってしまうと治らないため、なおのこと養蚕家は、赤ちゃんを育てるように大事に育てていたのである。

通常、養蚕家は春・夏・秋と年に3回、蚕を飼うそうだが、低温多湿の秋に飼育される蚕は、一晩でころっと死んでしまうこともしばしばだと言う。とりわけ標高の高い稲武地区では、秋の養蚕はうまくいかないようである。したがって、「いなぶまゆっこ」で蚕を飼うのは、5月と6月のみである。繭ができるまでに、およそ40～45日かかるが、その間、人間はほとんど毎日蚕につききりになる。蚕はその間に、体重は約1万倍、身長は27～28倍になる。内臓も含めて4回脱皮する。

蚕は成長日数に応じて、3.5日で1令、そこから2.5日で2令、3.5日で3令、4.5日で4令、7.5日で5令、と数える。ここまで22日ほど。5令を過ぎると、糸を吐き繭をつくり始める。その間際、蚕の体が縮んで透けてきたら、蚕は簇（ぞく）と呼ばれる「蚕の家」に入れられる。簇には、わらでできた「鉄砲簇（てっぽうぞく）」や、段ボール紙で枠づけられた箱がいくつも連なっていて回転させることのできる「回転簇（かいてんぞく）」などがある。ちなみに、蚕は、毎日うんちをするが、おしっこは繭を作り始める寸前に、一生に一度しかないそうである。

そんな蚕（繭）も、羽化（蛾になること）する前に熱風で殺してしまう。繭を振るとカラカラと音がするのは、繭の中で死んだ蚕の死骸が入っているからである。そして、その年の出来立ての繭からとつ

た糸を、伊勢神宮へと献糸するのである。

なお、卵を採ることは法的に禁止されており、許可をとった所でないとできないことになっている。

3.2 養蚕を知ってもらう

「いなぶまゆっこ」が、養蚕のことを知ってもらうために行なっている活動は実にさまざまである。

たとえば、道の駅や各種イベント会場で、「糸引き体験」などを行ない、養蚕の紹介をしている。かつて養蚕に触れたことのある人は「にいが懐かしい」と言って観に来てくれるそうである。

ほかにも、毎年、稲武地区の小学二年生が、15～16名で掃立を行ない、15～20匹の蚕を持って帰って育てている。「蚕の部屋」代わりにトイレトペーパーの芯を利用するという。飼育している間、小学生らは、自宅と「いなぶまゆっこ」との間を往復する。飼うことで、だんだんと興味がわく。祖父母と暮らす子どものなかには、祖父母が懐かしがって、一緒に育てていると言う子もいるらしい。蚕が「かすがいい」となり、世代間の交流が為されていることがうかがえる。

金田さんの考える「いなぶまゆっこ」の抱える最大の難問は、後継者の問題である。金田さん夫婦は指導者として、養蚕や糸取りなどに関する指導をメンバーにたいして行なってきた。言うまでもなく、こうした伝統技術の継承は、テキストがあればできるというものではけっしてない。しかも、技術の習得には時間を要するのである。

だが、「焦ってはいけない」、「楽しくなくてはいけない」と金田さんは言う。「気がある人」や「すすんでやる人」が「まずチャレンジすること」から始めてもらい、「自然にいけば」いいと考えている。各種イベントや小学生を対象に実施している養蚕体験教室は、そうした「いなぶまゆっこ」の養蚕にたいする姿勢が反映されていると見て取れる。

4 大学祭での紹介

2014（平成26）年11月1日（土）と2日（日）に開催された愛知学泉大学豊田学舎大学祭で、学生が中心となり、パネル展示と作品の販売を行なった。

まず、私の担当する二年生のゼミ活動の一環として、大学祭で模擬店を出店することになった。豚汁を作って販売するいっぽうで、「いなぶまゆっこ」を紹介するパネルを展示し、「まゆっこ」の作品を販売

させてもらうことにした。

そのために 10 月 8 日、ゼミ生 4 名とともに「いなぶまゆっこ」へ調査に行った。大学祭までの時間が限られており、学生を伴った調査は 1 回しか行なえなかった。学生たちは熱心にフィールドノーツを取りながらインタビューをした。私たちが訪問した際、私が 5 月の「掃立祭り」で餌をあげた蚕たちは、繭を作り、すでに熱風処理された後だった。小学生の頃に蚕を育てたことのある学生もいたが、はじめて繭を目にした学生もいた。帰り際に販売させていただける作品を預かり、持ち帰った。

フィールドノーツに基づいて、学生たちが B 紙一枚分ほどのパネルと、A5 サイズのチラシの作成を行なった。

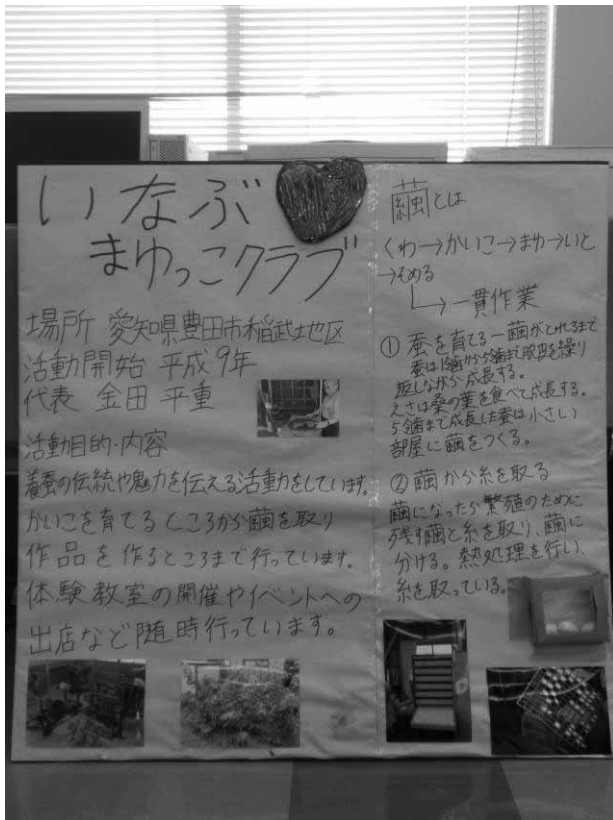


写真 8 学生が作成した「いなぶまゆっこ」の紹介パネル。
右下に、繭の入った箱が取り付けられている。

パネルには、立体的に取り付けた透明ケースに繭を入れ、人びとが手に取って見ることができるよう工夫した（だが、大学祭当日は雨天だったため、ケースには蓋をすることになった）（写真 8）。

チラシは、模擬店に立ち寄ってくれたお客さんや「まゆっこ」の作品を購入してくれた人に配布する目的で作成した。調査に行った 4 名の学生たちが、インタビューのなかでとくに興味を持った点や驚いた点について意見を出し合いまとめた。そして、チラ

シは「まゆっこ」の手作り感と温かみを出すために手書きで作成した（写真 9）。

実際に現地でインタビューをした 4 名は、「まゆっこ」の皆さんがどんなことを知ってほしいと考えているか、また、養蚕のことをあまり知らない一般の人びとがどんなことを知りたいと考えているのかを想像しながら、パネルとチラシの作成に取り組んだ。こうした他者についての想像力を養うという意味でも、この取り組みは意義あるものだったと思われる。

2015（平成 27）年以降も、今度は「実習生」とともに、同様の取り組みを行なっていこうと考えている。「実習」で現地をより詳細に調査することで、紹介内容をさらにブラッシュアップさせていくことができるであろう。

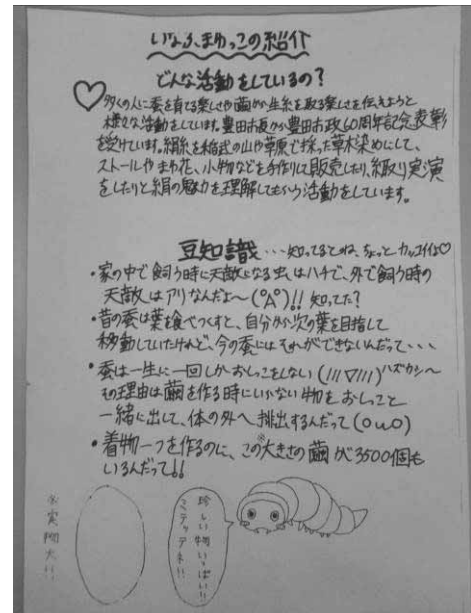


写真 9 学生が作成した「いなぶまゆっこ」の紹介チラシ。
繭の実物大のイラストが示してある。

5 地域ブランドとしての可能性

絹（シルク）製品として、世界的にはタイや中国のものが多く出回っている。日本国内でも群馬県は富岡製糸場の存在によって比較的知名度が高い。しかし、愛知県豊田市の養蚕という点、意外に思われる人もいるかもしれない。もちろん「いなぶまゆっこ」は商業的関心のもとに活動を行なっているわけではない。とはいえ、作品販売によって得る売上は、「まゆっこ」の活動資金となる。実際に、「稲武の羽衣」というブランド名でストールやショールを展開していることから、「まゆっこ」が地域ブランドとして一つの地位を確立する可能性について考察することには意義があろう。

須田文明（2014）は、フランスにおけるチーズを

めぐる議論を例示しながら、地域ブランドのもつ「真正性」について興味深い点を示している。須田の論考は農産物や食品のブランド性に関する考察だが、同じことが地域社会において生産される産品全般の地域ブランド性およびその「真正性」に当てはまると考えられる。

フランスでは、産品に特異性を与えるような地域の独自性のことを「テロワール (terroir)」と言うそうである。この語は、環境と人間との関わり合いの歴史が、産品に特異性を与えることを意味する。日本語の「地域性」という語は、地域特有の性質という広い意味で用いられる傾向があるが、「テロワール」の観点をを用いると、「地域性」が自然と人間の関わり合いの歴史を反映したものとして明確化される。そして、この「テロワール」こそが産品に「真正性」、すなわちホンモノらしさを与えるというのである。

現代において地域ブランドに求められる「真正性」には、二つのかたちがある。一つは、「評判」と客観的仕様を通じた品質特性の地域への結合 (のイメージ) からなる「真正性」であり、いわば「旅券 (パスポート)」としての「真正性」である。この「真正性」をもつ産品は各地に流通することができるため、他の産品との競合が生じる。とはいえ、継続的な販売が可能になる。日本においてこうした「真正性」をもつ地域ブランドとして、「今治 (のタオル)」、「魚沼 (産のコシヒカリ)」などが挙げられよう。

だが、もう一つの真正性がある。それは、消費者と生産者の「近接性」に由来する「真正性」である。「近接性」とはどういうことか。須田は詳述していないが、消費者と生産者との近さは、「生産 (者) / 消費 (者) の相互可視化」と言い換えることができよう。消費者の側が、生産の現場や生産者を実際に目にし、「近接性」を感じることで産品に対する「真正性」が強化される。と同時に、生産者の側も自分たちの産品がどのような消費者の手に渡るのかを目にし、「近接性」を感じることで産品の「真正性」をより高めようとすると考えられる。

その意味で、この「近接性」に基づく「真正性」は、生産者／消費者である諸個人から離れたところで自立して威力を発揮するものではけっしてない。それはむしろ、生産 (者) にたいする消費者の評判や関わり合いの度合いに応じてかたち作られる、「生産者と消費者とによる真正性の共同構築」(須田 2014: 83) なのである。

「いなぶまゆっこ」が小学生らを対象に行なってい

る活動や各種イベントは、まさにこうした「近接性」によって獲得される「真正性」を実現しているといえよう。稲武の自然環境と稲武の人びとの間で生み出されてきた養蚕の歴史。そうした稲武の「テロワール」を、「まゆっこ」のメンバーが体現し、人びとに直接的に伝えているのである。

6 おわりに

「人脈」とは、人と人との関係が社会のなかで“脈”となり、社会という身体に“血”を流し、やがてそれを活性化させるものである。

セミナーで生まれた一つの小さな「人脈」が、「まゆっこ」のメンバーと私たちをつなぐ「人脈」になった。重要なのは、これらの“脈”がかならずしも人為的に、あるいは人間の主体的な営為によってつくり出されたわけではないことである。

内山節は、社会を「知性の力でデザインするのではなく、デザインすることのできる基盤をつくること」が重要であると言う。基盤をつくることができれば、その基盤が社会をデザインする。この「基盤」とは関係のことである。だが、その関係 (「基盤」) は、自然と人間、人間と人間との間に「生まれるもの」であって「つくれるものではないのかもしれない」のだ (内田 2010: 194-5)。

社会をデザインすることは「懐かしい未来」を求めることである (内山 2010: 193)。来るべき未来は、過去に培ってきた基盤としての関係のなかから生まれるのだから。だが、その関係性は人間がひとりで主体的につくりだすものではない。ならば、私たちはあれこれ考える前に、いま在るさまざまな関係にもっと身を委ねるべきなのかもしれない。

※本研究は、平成 26 年度「地域社会デザイン総合研究所研究プロジェクト」の助成を受けて行なわれた。

引用文献

須田文明, 2014, 「地域ブランド——ふたつの『真正性』について」 榊渥俊子・谷口吉光・立川雅司編著『食と農の社会学——生命と地域の視点から』ミネルヴァ書房, 71-88.

内山節, 2010, 『共同体の基礎理論——自然と人間の基層から』農山漁村文化協会.

(原稿受理年月日 2014 年 12 月 6 日)